

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H02313

研究課題名(和文) いえのミュージアム概念による居住環境の保全継承の方法論

研究課題名(英文) Methodology for succession and conservation of living environment through the concept of ecomuseum

研究代表者

大原 一興 (Ohara, Kazuoki)

横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授

研究者番号：10194268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：「まち」や「いえ」あるいは広い意味での家族・コミュニティのあり方やその価値を、住民や広く一般の人々に見える化し、ミュージアム化(調査研究、収集保全、展示教育普及)する試みを、ここでは「『いえ』のミュージアム」と呼び、この概念による実例を総合的に整理し、それぞれの具体的な展開方法とそれによる社会的寄与やその可能性を明らかにし、国際的・学際的な討議の場における様々な言説を収集し、とくに国内外のエコミュージアム等の地域分散型の文化施設の事例について評価することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地域や生活環境をミュージアム化する試みは、これまで断片的に紹介され、横断的に捉えられてこなかった。これら総じて「いえのミュージアム」への経過において、住民が主体となって地域や住まい、居住文化を保全し次世代に継承していくための計画的な手法としてどのような方法が有効か考察されて来なかった。今回、「いえのミュージアム」概念による事例の再編集、様々な実例やプロジェクトの再整理、居住文化の保全継承のためにとりくみとしての「いえのミュージアム」手法による方法論の確立、について明らかになり、これにより新たな学術分野の領域を示すことができたと言える。

研究成果の概要(英文)：This project aims to visualise and musealise (research and study, collection and conservation, exhibition and education) the town, house, or family and community in the broad sense of the term, and its value to residents and the general public, calling it a 'house museum'. The project also collected various discourses in international and interdisciplinary discussion forums, and was able to evaluate examples of regionally decentralised cultural facilities such as ecomuseums, both at home and abroad.

研究分野：建築計画

キーワード：居住環境 保存継承 エコミュージアム 博物館 コミュニティ・ミュージアム 図書館 ライブラリ  
空き家

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) ミュージアムの新しい展開と地域化

「いえ」や「まち」をミュージアム化することによって、地域の居住文化や環境を保全継承する動き、例えば、保存建築物や古民家活用などで生活体験や居住文化の伝承、地域住民主体でおこなうエコミュージアム(地域まるごと博物館)などにおける地域固有文化の保全継承、住宅地における住民自身による学習や保全活動など、地域と一体となったミュージアム活動によって、地域のアイデンティティを確認し、その地域に住むことの誇りを取りもどすなど、「まち」や「いえ」あるいは広い意味での家族・コミュニティのあり方をミュージアム化する試みが世界各地でおこなわれている。これをここでは「『いえ』のミュージアム」概念と捉える。

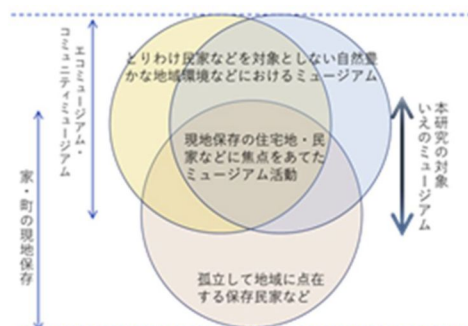
歴史的に価値のある建築物を移築保存する従来の野外博物館では、これまで、建築物単体の保存を主目的に、生活史還元運動(Living History Movement)として、往時の居住文化の再現や演示などをおこない、博物館専門職からの積極的な関わりによって一般市民に居住文化の伝承をおこなっており、展示技術・手法として発展してきている。

一方、地域に存在している現地保存型の古民家や、文化財的価値の高くない庶民住宅は、地域に孤立状態にあるものが多く、保全のための方策に出会わないまま、消滅している。一部の地域では、これら地域にある民家を巻き込んで地域全体を博物館化するエコミュージアムとして展開しているところもある。エコミュージアムは、1960年代の終わり頃から試みられて以来、現在、世界的に広く流布し観光にも流用されるようになってきたが、もとより行政や外部資本に依存せず、地域住民が自らの居住文化を積極的・戦略的に利用し、対外的に発信する意志が根底にある。このような活動は、主体を住まい手や地域住民におき、地域社会と一体となった、あるいは地域社会を主体とした、建築学の新しい方向性を指し示す動きと捉えることができる。

このように、個々の地域、個々人の住まいへの思いを発端に、独自に展開してきた共通の動きについては、これまで断片的に紹介され、横断的に捉えることは為されていなかった。2016年の日本建築学会大会時の研究協議会「居住文化とミュージアム」が建築学ではそのはじめての試みだったと言える。

### (2) 「いえ」のミュージアムについて

「いえ」や「まち」あるいは広い意味での家族やコミュニティのあり方を、ギリシア語ではエコロジーやエコノミーの語源であるオイコス(OIKOS)と呼んでいる。このOIKOSをミュージアム化する試みが各地でおこなわれている。これらは、エコミュージアムの提唱者であるG.H.リヴィエールにより構想された「『いえ』のミュージアム」概念による取り組みである。明確な定義は無いが、リヴィエールは、1960年代の民族遺産保全運動の中で、建築物は社会を表現すると考え、住宅や街の保全や博物館資料化 musealization に尽力し、後に「家=OIKOS」+ミュージアムとしての「エコミュージアム(écomusée)」を構想し実践した。OIKOSは、家族や村などの限定された構成員の中で相互に影響を及ぼし合い、利益を交換することで構成体全体がより豊かに育っていく系あるいは圏としての営みを意味している。つまり「いえのミュージアム」とは、住まいやまちを居住者によってミュージアム化(調査研究・収集保全。展示教育普及)することで、これによって、社会(生活・文化・産業)とその発展に貢献するものと捉える。



## 2. 研究の目的

本研究では、国際的・学際的な研究会による討議と、国内外の事例を考察することによって、本研究の対象となる概念に基づいた学術的・実践的枠組みを方法論として提示し、今後のこれらの取り組みとして「いえ」をミュージアム化する方法の実質的な展開とそれによる社会的寄与の実態や可能性を明らかにすることを目的とする。

具体的には、「いえのミュージアム」の実現の促進方法、すなわち住まいや居住地をミュージアム化することについての条件整理、手法の整理と開発、促進のための制度・仕組みづくり、それを社会的に活かすための仕組みづくりの考察、評価などを明らかにする。

これら総じて「いえのミュージアム」の設立の経過の中で、住民が主体となって地域や住まい、居住文化を保全し次世代に継承していくための計画的な手法としてどのような方法が有効か、これまでにまとまりのある考察はなされていない。そこで、国内外の先進事例からその方法論を確立することが求められていると言えよう。このためには、密接に関連する2つの課題が挙げられる。

「いえのミュージアム」概念による事例の再編集 様々な実例やプロジェクトの再整理  
居住文化の保全継承のための取り組み いえのミュージアム手法による方法論の確立

これら2つの課題を明らかにすることが、本研究では具体的な目的となる。

### 3. 研究の方法

上記の課題に対して、以下に述べる3つの方法で研究を進めた。

#### (1) 基礎的な文献資料収集および事例情報の収集

2019年、ICOM(国際博物館会議)京都大会(9月)時に、世界各地からの博物館関係参加者から、類似した実例と活動についての最新情報を収集したが、コロナ禍(COVID-19)の下では、海外渡航ができなくなったため、国際会議のオンラインにおいては情報収集があまり進まなかった。

論文として発行された資料や図書から、専門家ではない個人の力によるアマチュア・ミュージアム、DIYミュージアムなどと呼ばれる自発型活動の存在を知り、ドイツ、ポーランド等における実例の情報を収集した。

これまでのエコミュージアムに関する国際会議の動向をレビューし、日本エコミュージアム研究会において過去50年間の評価をおこなった。

あわせて国際博物館会議において博物館の定義に関する議論に参加し、次期大会(プラハ2022年)での改訂に向けて、国内の学会等委員会において議論した。コロナ禍においても可能な限り継続して多方面の国際的なネットワークから、事例に関する最新情報を収集しリモートにより開催される会議などの視聴や参加をおこなった。

海外の会議などへのオンライン参加では、民族の自立を促す民族コミュニティのためのミュージアムの実例報告などが照会されたことにより、いえのミュージアムについてもその視点を加える必要性を感じるなど新たな情報が付加された。

#### (2) 研究交流(研究会への参加、フォーラムの実施)

2019年にはICOM総会期間中に大阪平野町でICR(地域博物館の国際委員会)とJECOMS(日本エコミュージアム研究会)共催によるエコミュージアムのフォーラムを開催し、国内外からの報告と協議をおこない、連続して企画したポストカンファレンスツアーとして神奈川県内でのエコミュージアム活動を主体とした一般公開による国際フォーラム「エコミュージアムとコミュニティミュージアムのフォーラム」を企画したが、台風19号の影響により中止となった。海外の研究者・実践者の招致と討議はかなわなかったが、参加予定者の研究報告などを獲得したほか、国内の事例紹介のためのこれまでの動向をまとめた資料集を作成した。

ICOM総会(2019京都、2022プラハ)のほか、インクルーシブ・ミュージアム国際会議(ブエノスアイレス)において、日本におけるエコミュージアムの紹介をおこないその内容についての協議とともに、海外事例についての情報交換をおこなった。

#### (3) 国内外事例調査

国内におけるエコミュージアム(神奈川県、山口県他)等の現地調査を実施し、ヒアリング、インタビューをおこなった。国内においては、自治体との関係や、伝統的建造物群保存地区との関係などについて同様の試みや取り組みを行っている事例を抽出し、その具体的な制度について概要を整理した。さらに、アジアにおける居住地の保存、開発の事例を調査し、村や町の変容と保全への寄与についての知見を得た。

さらに、いえのミュージアムの概念にもとづく住宅転用の文化情報施設として、一般住宅地の民家活用型の図書館活動に着目し、国内の実例の情報を収集した。太田市、小布施町、沼津市等における分散型図書館や市民参画型図書館の活動事例の調査をおこなった。

海外は、アジア地域、とくにタイ王国における村落の住民主体によるエコミュージアムで、少数民族の文化を伝承する活動の現地調査により活動実態を聞き込んだ結果、当該地では、村の中の主要な個人ミュージアム開設以外にも、一部屋を公開する事例や、寺院の収集品によるミュージアムなどが実質的に村のミュージアムの役割を果たすなど、事例を支える周辺環境における動きについての貴重な知見が得られた。

プラハ、ウィーン、ロンドン周辺他における、建築的な評価の高い保存住宅の展示・公開や展示に関する博物館や文化財行政の関わり方の実態、また住環境の保全のしくみ、スウェーデンにおけるエコミュージアムの近年の展開の実態、これらの活動を支える住民の活動組織および自治体の関わりなどの運営事例について調査を実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 国内事例の総覧と分類

##### 国内事例の抽出

全国の実例を全国博物館総覧他の資料から収集分類し住宅と博物館の統合形態と博物館活動を軸に分析考察を行った。各々の意義と有効性を明らかにする。主要な事例については事例リストを資料として作成した。具体的には、日本博物館協会の調査による全国の博物館情報を収録している『全国博物館総覧』から該当事例を検索、収集し考察した。

##### 統合形態による分類

いえのミュージアムと言えるものの事例を、まず住宅と博物館との「統合形態」によって大き

く以下の 3 通りに分類した。

【地域】：地域をまるごと博物館化したもの。伝統的建造物群保存地区においては統一した意匠の建築群や、河畔や通りなど都市構造がはっきりしていて領域が分かりやすい。エコミュージアムにおいては地域に点在する住宅を展示物とし、それらを地域住民が利用し居住文化を継承する。その地域住民の活動やネットワークを博物館と捉えているが、博物館総覧には、単体の建物単位でのリストとなる。

【ミュージアム施設】：住宅を館内又は敷地内に展示収蔵資料や付属施設として有する博物館施設。住まいながら自力で運営している博物館、建築物を対象とする博物館も含まれる。野外博物館は、移築した複数の民家を展示する民家公園や、現地保存型でも保存だけでなく展示や調査研究を併せ持つミュージアム機能を有するものが多く見受けられる。その他建築博物館、DIYミュージアムなども含む。

【住宅、住宅型施設】：住宅単体そのものを展示対象としているもの。また、住宅やその附属屋を空間として活用して博物館化しているものは多い。自宅を自らのコレクションを展示する場として地域に開放し博物館活動を行っている民間の私的なものも含む。

#### 博物館活動による分類

博物館活動としては、以下の5つに分類できる。

A【居住環境展示機能】：居住環境・生活環境、民俗などを保存公開するとともに、無形文化財の行事や風習、民俗芸能などの展示収蔵も行う。

B【コレクション・ストーリー展示機能】：芸術作品や工芸品等のコレクションを展示する、あるいは歴史や業績、エピソードなどを伝える。

C【建築資料保全機能】：建築史技術史的な価値の保全。建築そのものを展示として見せ、その保有している環境的な意義や、技術について知ることができる。

D【教育普及機能】：各種講座や伝統的な文化活動等の学習の場として利用する。

E【地域交流機能】：伝統的な建築物などを博物館機能以外の積極的な転用を行い、市民団体や地域住民等の活動拠点として利活用する。

#### 博物館活動の展開の実態

「博物館の敷地内の屋外展示」と「野外博物館」のように住居、周辺環境、集落と展示対象が広がるにつれて、多世代の利用が図られ、子どもだけでなく認知症高齢者の回想法に利用されるなど、教育普及活動の幅も広がり、更に交流の場として多種多様な活動にまで発展していく。それと同様に、「地域」を対象とした博物館はより広域を展示の対象とし、住民や産業間の地域交流もより活発になることに寄与しているといえる。

屋内展示は展示資料の保存において最も有効で居住環境そのものの学習的展示機能が高くなる。住宅を設計した建築家の芸術的な価値やその時代の社会背景などの状況を室内において実体験できる環境は、保存された建築空間でこそ手に入れることができる。また、環境共生技術の実体験など、科学的な住宅環境の理解に有効な利活用がされている。

#### 住宅の保存状態

移築して保存する割合は全体の3割程度で、現地保存は4割程で復元も合わせると6割程度になる。コレクション・ストーリー展示機能は移築の割合が小さく現地保存の割合が大きい。既存の住宅ストックを利用した展示空間をもつ美術館が多い。また、再現する割合も大きく、これはアトリエや書斎の再現など住宅に付随する作業空間の再現によるものが多い。

#### 住宅種別

住宅附属屋は教育普及・地域交流に用いられやすい。茶室は一般への貸し出しが頻繁に行われている。蔵は展示室として使われることが多く、その他コンサートや各種講座などに用いられている。大きな住宅ほど附属屋や庭園・茶室等を有している。別荘・洋館は建築資料として保全され、かつ非日常の展示空間をもつ美術館としての活用が多い。

#### 実態のまとめと課題

各々の統合形態によりいえるミュージアムの中心が住宅であることの特徴が、以下のように把握できた。

【地域】：その手法的特徴として教育普及や地域交流への展開がみられる。この場合は個人資産など博物館資料として所有することのできないものが様々で保存・展示活動が困難であり、地域住民同士さらには行政等を巻き込んだネットワークの構築が課題である。

【ミュージアム施設】：展示手法としては屋外展示が多く、博物館付属施設の活用で教育普及や建築資料保全への展開がみられる。一方、居住文化と一体的な展示活動がなされていないものも少なくない。

【住宅、住宅型施設】：活動の方法は作品の展示を行う、文化活動を行うなど様々だが、住環境や歴史の保全に有効である。しかし、小規模単体で活動するため、環境整備や持続的な活動などの課題が大きい。ここに対しては、公的な支援やボランティアなどのサポート体制が必要となっている。

## (2) エコミュージアムをめぐるこの半世紀の議論

エコミュージアムが新しい博物館の名称として提唱されたのが1971年であるが、その後の50年間のICOMその他の国際的な研究グループや国際会議の動向をまとめ、その時々で話題となったテーマの流れを押さえていくことによって、エコミュージアムがその時々々の社会において

どのような役割を持つのか、経年的に議論の経緯を捉えた。取り上げられるテーマに見られる特徴は以下の通り。

#### 多様なステイクホルダーによる推進

博物館学における挑戦に始まったエコミュージアムの発展と推進には、博物館関係者だけではなく、多様な専門家と市民が関与している。会議の場では、担い手としての市民アクターや、人類学、地域経済、観光、政治、建築、造園、都市計画、様々な分野が集い、実践に関する議論ができる点で、国際的であると同時に学際的・職域的な課題設定がなされる点がエコミュージアムの特徴である。

#### 環境問題への対応の希薄化

遺産の地域全体での保全という中心的課題に関して、これまでの会議では、自然環境の保護に集中した報告はそれほど多くない。何度となく過去にはエコロジーの視点からの環境学習機能が求められたが、実際の活動は、長期に維持されているとは言えず、自然環境、文化財の博物館的活動だけではなく、むしろ地域活動として展開している。

#### 連帯とグローバリゼーション

とくにヨーロッパにおいては、意識として連帯と分断の往復運動を繰り返し、自国アイデンティティが不安的な状況に揺れ動いている。この50年間には、EUによる国境の無化、その後やってきたニューリベラリズムとグローバリゼーション、それに対応するかのような国家主義・極右の台頭、移民排斥、雇用問題、近郊のゲッター化などがとりわけ都市の問題となっており、地域展開を行うエコミュージアムにおいては、地域社会の政治に左右されている。

#### ランドスケープのミュージアムとしての意義

ヨーロッパにおいては、2000年のELC（欧州ランドスケープ条約 European Landscape Convention）締結が極めて大きな出来事であり、エコミュージアムはこの点において、まさにその地域の活動の中心的役割を担っている。

### （3）類似事例の検討と今後

UNESCO関連での地域の遺産を保全する活動としてのジオパークやエコパークが、エコミュージアム活動と非常に近似してきている。目指すところは保護と共存と教育と継承という、総合的な地域遺産の保全と持続可能性として共通しているのであり、いへのミュージアムのもつそもそも統合的特性が、このような類似した活動を誘発している。

また、地域に溶け込んで文化的活動を進め、社会教育的手法をもっていく施設の例としては、地域分散型博物館と同様、図書館の地域化、市民化が進んでいる実態に注目して、マイクロライブラリなどの活動実践を参照し、関連する様々な事例を捉えた。実際に、居宅から私設図書館への住み開きとしての活動、地域分散型の町じゅう図書館の展開など、類似した点と同時に、担い手不足の持続可能性や維持管理など、また既存の公的な施設との連携の推進など、共通した課題が見受けられた。

これらの動きでは、ヨーロッパでは、地方の村の郷土博物館の再認識や、DIY museum, Wilde Museen などと呼ばれる手作りの私的発想による博物館の興隆などが見られており、アジアでも観光や農村産業としての意味もあり、農山村や少数民族の固有の文化を保全し展示する博物館地域が増えており、これには政府も支援している傾向がある。成熟した文化をもつヨーロッパでもなく、観光により人の交流人口が拡大するアジアでもなく、中間の立場の日本でのこれら「いへのミュージアム」の今後は、政策の方針次第であるとも言え、予測はむずかしい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大原一興	4. 巻 26
2. 論文標題 エコミュージアムに関する国際会議等における議論の経緯 50 年を振り返って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エコミュージアム研究	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 五嶋薫子・藤岡泰寛・大原一興	4. 巻 -
2. 論文標題 旧駅舎建築の世代継承に関する研究 長期にわたる一時解体を経験した旧国立駅舎を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海) 建築歴史・意匠	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田上夏伊・大原一興・藤岡泰寛	4. 巻 -
2. 論文標題 居住文化を保全継承するための住宅とミュージアムの統合事例に関する考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海) 建築計画	6. 最初と最後の頁 585 - 586
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 青沼駿介・大原一興・藤岡泰寛	4. 巻 -
2. 論文標題 美術館の付加的施設からみた空間構成に関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 546-547
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 照沼翔大・大原一興・藤岡泰寛	4. 巻 -
2. 論文標題 建築物保存からみたエコミュージアム活動の可能性に関する考察 三浦半島における活動の行政と市民の連携に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 197-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田美紗・大原一興・藤岡泰寛	4. 巻 -
2. 論文標題 旧療養所建築の博物館的活用に関する研究 茅ヶ崎市 南湖院を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 561 - 562
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮城仁美・大原一興・藤岡泰寛	4. 巻 -
2. 論文標題 公共図書館における地域資料の活用に関する施設計画の研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 571-572
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大原 一興, 藤岡 泰寛, 江水 是仁	4. 巻 -
2. 論文標題 出づくりの村「語り部」による二拠点型居住の伝承 修正版 : 長野県阿智村清内路集落におけるエコミュージアム活動から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 住総研研究論文集・実践研究報告集	6. 最初と最後の頁 201 - 211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大原 一興, 藤岡 泰寛, 江水 是仁	4. 巻 -
2. 論文標題 出づくり文化の継承におけるエコミュージアムの役割の考察:長野県阿智村清内路集落におけるエコミュージアム活動から その2	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 住総研研究論文集・実践研究報告集	6. 最初と最後の頁 179-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20803/jusokenronbunjisen.46.0_179	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江水 是仁	4. 巻 3
2. 論文標題 「いえ」のミュージアム化 - ロンドン近郊ニュータウンの事例を通して -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東海大学資格教育研究	6. 最初と最後の頁 25 - 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江水 是仁	4. 巻 28
2. 論文標題 エコミュージアム活動にかかわることによる地域住民の変化 ~ well-beingの視点から ~	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 エコミュージアム研究	6. 最初と最後の頁 50-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江水 是仁	4. 巻 25
2. 論文標題 エコミュージアム見学経験を通じた学芸員課程に在籍する学生の学びの傾向 ~ テキストマイニングを用いた分析をもとに ~	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エコミュージアム研究	6. 最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 森田芳朗, 江口亨, 高村和明, 青木留美子	4. 巻 25
2. 論文標題 住宅地におけるエリアマネジメントの進捗状況と課題: まちにな ひばりが丘の活動に関する居住者アンケート調査から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会技術報告集	6. 最初と最後の頁 1317-1322
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ikuro Shimizu	4. 巻 4
2. 論文標題 The Latent Power of Sustainable Tourism in Cultural Landscape Resilience in Taketomi Island, Okinawa Prefecture, Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SEATUC journal of science and engineering	6. 最初と最後の頁 76-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水 郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 周縁社会のニューノーマル タイのフィールドにおけるフィールドワーク拡張の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 795-798
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水 郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 フィールドワークによる居住文化の再発見と再構築 北タイのエコミュージアム活動から考える現代のフィールドワーク	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 1097-1100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 知 / 大原 一興 / 藤岡 泰寛	4. 巻 813
2. 論文標題 エコミュージアム参加者の居住地域に関する意識についての研究 - 神奈川県茅ヶ崎市における活動を事例として -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 2932-2941
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤岡 泰寛 / 大原 一興	4. 巻 814
2. 論文標題 学生入居と高齢者の暮らしの関係に関する研究 - 高齢化したUR住宅団地における異世代居住の試みに着目して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 3225-3234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計4件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 大原一興
2. 発表標題 エコミュージアムに関する国際会議等における議論の経緯 40年間を振り返って
3. 学会等名 日本エコミュージアム研究会研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuoki Ohara
2. 発表標題 Creating Sustainable Community and Heritage through Ecomuseum
3. 学会等名 11th International Conference on the Inclusive Museum (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuoki Ohara
2. 発表標題 Keynote; Japanese Museum Architecture
3. 学会等名 ICAMT/ICOM, 25th ICOM General Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuoki Ohara
2. 発表標題 Ecomuseums in Current Japan -Significance and Challenge
3. 学会等名 International Symposium on Localization Inheritance of Living Heritage (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 横浜国立大学都市科学部 (編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 1052
3. 書名 都市科学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	江水 是仁  (Emizu Tadahito)  (40609351)	東海大学・ティーチングクオリフィケーションセンター・准教授   (32644)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森田 芳朗  (Morita Yoshiro)  (50396769)	東京工芸大学・工学部・教授    (32708)	
研究分担者	鈴木 毅  (Suzuki Takeshi)  (70206499)	近畿大学・建築学部・教授    (34419)	
研究分担者	清水 郁郎  (Shimizu Ikuro)  (70424918)	芝浦工業大学・建築学部・教授    (32619)	
研究分担者	藤岡 泰寛  (Fujioka Yasuhiro)  (80322098)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授    (12701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関